

【基盤研究(S)】

人文社会系 (社会科学)



研究課題名 現代日本における若年層のライフコース変容と格差の連鎖・蓄積に関する総合的研究

東京大学・社会科学研究所・教授 いしだ ひろし
石田 浩

研究分野：社会科学

キーワード：社会学、階級、階層、社会移動

【研究の背景・目的】

1990年代以降、若年者を取り巻く社会・経済的環境は大きく変貌してきた。若年就業にかかわる非典型雇用、低賃金、長時間労働などは社会的課題として認知され、若年層の晩婚化・未婚化は少子化をもたらす主要な要因といわれている。このような就業、結婚などにかかわる社会の変動は、若年者自身の意識や価値観の変容と関連していると考えられる。

本研究の目的は、若年者を対象にしたパネル(追跡)調査を継続することにより、教育・就業・家族・健康・意識といった多面的な側面を「ライフコース」の変容として包括的・総合的に捉えることである。さらにその変容過程を「格差の連鎖・蓄積」という理論枠組を用いて、ライフコースを通じた格差生成のメカニズムとして解明することにある。さらに韓国・台湾との比較を行うことで、日本の若年者が経験してきたライフコースにおける格差生成過程の特色と類似性を明らかにする。

【研究の方法】

本研究は若年者と壮年者を対象としたパネル調査と2004年3月に卒業した高卒者を追跡する高卒パネル調査の3つを実施していく。2007年時点で20-34歳の若年と35-40歳の壮年を日本全国から抽出し、2007年から2010年まで毎年追跡調査を実施してきた。高卒者についても2004年3月に全国4県の高校を卒業した生徒を抽出し、卒業後6年間ほぼ毎年追跡調査している。これらの3つのグループを今後5年間継続して追跡する予定である。

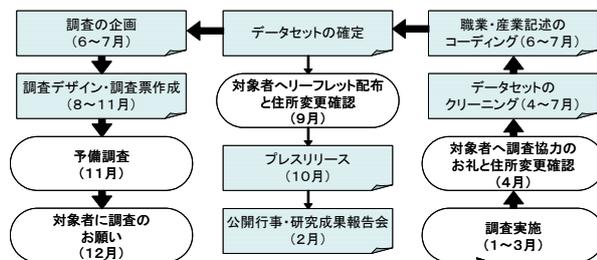


図1 パネル調査実施過程

調査は図1に示したようなプロセスを経て行われる。毎年度1月から3月の調査実施に向けて、調査の準備を6月ころから開始する。四角のボックスは研究者の作業を表し、楕円のボックスは調

査対象者へのコンタクトを表す。太い矢印は調査の企画・実施の流れを示し、1年間のサイクルで回転していく。細い矢印は研究班で行われる分析と成果発表の流れを示す。

パネル調査の実施に関しては、東京大学社会科学研究所に附置されている社会調査・データアーカイブ研究センターを拠点としている。「パネル調査の企画・実施」のための「調査実施体制」と「調査データの分析・研究」のための「分析研究体制」を同時に立ち上げて平行して進める。

【期待される成果と意義】

すでに若年・壮年を追跡するパネル調査を実施してきたが、転職・結婚・出産などの「重要なライフ・イベント」を経験した対象者はまだ数が限られている。そこで調査を継続し同じ対象者を追跡することにより、これから発生するイベントを丹念に追うことができる。このようなデータを分析することで、ライフコースの初期の格差(不利な状況)が蓄積していくのか、それともセカンドチャンスがあるのか、どのような要因が不利の蓄積を阻むのかについて正確に把握することがはじめて可能となる。

本研究の理論的な意義としては、ライフコースの変容を、「格差の連鎖・蓄積」という理論的枠組みから整理し直し、ライフコース研究と格差研究を橋渡しすることで新たな学問的フロンティアを切り拓くことが期待される。さらに若年雇用政策や晩婚化・少子化施策に関して具体的提言を導き出すことが期待される。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

Hiroshi Ishida and David Slater (eds.) 2009, *Social Class in Contemporary Japan*, (London: Routledge)

石田浩・三輪哲・村上あかね、2009、「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査(JLPS)2008」にみる現代日本人のライフスタイルと意識『中央調査報』616号、pp.1-7

【研究期間と研究経費】

平成22年度-26年度
153,900千円

【ホームページ等】

<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>